

漆黒鴉学園3

第一章 元凶の記憶

一話 夢のような話

六月の眩しい日差しが昼休みの庭園に降り注いでいる。

私、宮崎音恋は、庭園に咲く白い薔薇を夢見心地で眺めていた。

三日眠らずにいると起きたまま夢を見ると聞いたことがあるが、私は夢を見ているのだろうか。

前世にブレイしていた『漆黒鴉学園』という乙女ゲームの世界に、脇役として転生しているなんてことが、そもそも夢みたいな話だ。

しかもそれは、前世での私の生き方に感銘を受けたという神様が、私の幸せを願って与えてくれたものなのだという。おまけに、それを鴉から告げられるなんて、本当に夢みたいな話だ。

でも、夢じゃない。これは現実であって、今の私の人生だ。
私はどうとうとして閉じそうになる瞼を大きく開く。

この間、夜の学校で真つ暗な部屋に閉じ込められて以来、不眠症気味になってしまった。

眠気を感じるのに、目をつぶった時の暗闇が怖くて眠ることができない。寝不足の頭は、今日の

記憶すら曖昧だ。

緑橋くんと図書室で会ったのは、夢？ 笹川先生と保健室で話したのも、サクラが泣きそうになつていたのも、夢？ 今ヴィンス先生に膝枕されているのも、夢だろうか？

けれど頬を撫でられる感触とヴィンス先生の甘い香りが、これは夢ではないと伝えてくる。目を閉じれば、このまま眠れるような気がしてくる。

安堵を感じるヴィンス先生の香りが、私を眠りに誘う。誰かがそばにいれば、眠れるみたいです。一人でいることの多かつた私は、今まで独りを苦に思ったことはない。

それなのに、ここにきて誰かという時間が多くなって、独りが怖くなってきた。

あの日。暗闇に閉じ込められた後、屋上でみんなと一緒に流星を観て、私は安堵のあまり泣いた。皆がそばにいる、私は独りじゃないんだと実感できて涙が止まらなかつた。

だけど、みんなが周りにいて安心できる場所というのは、舞台の真ん中……つまり、このゲームのヒロイン、サクラの居場所だ。

そこにいくことは、私の本意ではない。サクラの恋愛の邪魔をしようし、なにより私が望む平凡な普通の人生を歩めなくなる。

神様が私のハッピーエンドをいくら望んでも、また、そうなるように神様にサポートを頼まれた黒巣くんがいくら画策しても、無駄だ。

私にとって、サクラは懂れの人で、そばにいたい人。

この日差しのようにキラキラした優しい眩しさで私を温かく照らしてくれる大切な親友だ。

彼女が幸せになれるよう、私は彼女の恋を見守りたい。そのためには、私がヒロインの居場所に立つわけにはいかないのだ。

彼女の笑顔を守るためなら、たとえ寝不足になっても……

「……ヴィンス、せんせ……」

「なんでしょう？」

眠気たつぷりな声は掠れてしまったけれど、ヴィンス先生の耳には届いたらしい。私を見下ろすヴィンス先生は微笑みを浮かべて、指先で私の髪と頬の輪郭を撫でる。

「……この世で最も大切な人と、自分……どちらを取りますか？」

質問までに時間がかかったけれど、ヴィンス先生は急かすことなく待つてくれた。

花を愛でるように優しい手付きで私の髪を撫でながら、静かに声を発する。

「最も大切な人とは、誰のことですか？」

目を開くと、穏やかな青い眼差しと目が合った。

「音恋さんにとって、その大切な人が自分より優先したいほど大切ならば、その大切な人を選べばいいのではないですか？」

優美な声が、静かに回答する。

サクラが、自分より上か下か。

どちらか……、と考えている時点できつと自分自身が最も大切なのだろう。サクラは私にとって、とても大事な親友だけれど、私は自己中心的だから……

「眠れないほど悩んでいるのは、自分とその大切な人を秤はかりに掛けていることについてですか？」
ヴィンス先生はそっと、私の顎あごの下に指先を滑らせる。

「あまり深く考えなくていいと思います。どちらにせよ、音恋さんの出した答えは、貴女自身にとって大切なものになるでしょうから」

話の途中なのに、柔らかなヴィンス先生の声の子守唄のように眠りを誘う。

私は予鈴が鳴るまで、ヴィンス先生の膝の上で束の間の眠りを堪能したのだった。

二話 保留

その頃。昼休みの生徒会室に、容姿端麗ようすたんれいな生徒会メンバーが召集された。

大きな窓を背に座るのは、桃色をほんのり纏まとうベージュ色の髪を持ち主。生徒会長で、九尾きゅうびの妖まじ孤この血を継ぐ桃塚ももづか星司せいじだ。彼は皆を見回しながら、口火を切った。

——宮崎音恋に「学園の秘密」を明かし、関係者にするか否か。

純血の吸血鬼でありながら、人間の音恋を寵愛ちよあいし、彼女のそばにいたために、この学園の教師になったヴィンセント・ジェン・シルベル。彼の命を狙うハンターが存在し、そのハンターはヴィンセントを狩るためなら、手段を選ばないらしい。つまり、ヴィンセントの弱点である音恋を巻き込むことになんの躊躇ためらいも持たないだろう、と桃塚は告げた。

「あ、あの、ヴィンセント先生を狙うなんて……そ、そんなこと許されるのですか？」

長めの前髪で顔を隠し眼鏡をかけた男子生徒が、戸惑いでいっぱいになりながら問う。彼は生徒会書記で、メデューサの血を継ぐ緑橋ルイ。

ヴィンセントは、モンスターの中でも頂点に君臨する吸血鬼の純血種だ。

「許されないよ」

桃塚は静かに首を横に振った。

「三十年前、この学園が崩壊に追い込まれそうになった事件、知っているよね？」

「あっ……」

緑橋は言葉を失う。

漆黒鴉学園は、モンスターの血を継ぐ子ども達が人間に交じって学ぶために設立された学園。いわば人間とモンスターの共存の象徴とも言える。モンスターの存在を知る人間達は、モンスターの血を継ぐ生徒達と協力して、よりよい学園を作ろうとしてきた。

そんな学園が三十年前、崩壊の危機に直面した。

きっかけは、純血の吸血鬼であるヴィンセントが、漆黒鴉学園に通うハンター一族の娘を愛したこと。

「吸血鬼とハンター。二人が結ばれることを許さない双方の思惑のせいで、ハンター一族の娘が学園で死んだ。それにより、ここは危うく吸血鬼とハンターの戦場にされるところだった」

深紅の髪を持つ生徒が腕を組んで淡々と口にする。桃塚の斜め前の席に座る生徒会副会長——吸血鬼と人間のハーフである赤神淳あかみじゆんは、続けて言う。

「三十年前は、ハンター側もこの学園をよく思っていなかったし、吸血鬼側も人間とモンスターの共存の象徴であるこの学園をなくしたいと思っていたのだろう。ヴァインセントとハンター一族の娘、東間紫の仲は、格好の火種だったんだ」

そして悲劇は起きた。

「彼女は、ヴァインセント先生を仕留めるための罠にされた。吸血鬼は素早い。隙をつかなくちゃ人間では勝てない。だからハンター側は人間である彼女を、罠に使ったんだ。その結果は……」

桃塚が最後まで言わなくとも、生徒会メンバーは知っている。

自分のせいで危険に晒されたヴァインセントを守るため、東間紫は自分の命を絶つたのだ。もし、ヴァインセントが命を落とせば、吸血鬼は復讐を名目に戦争を起こすだろう。そうならば、共存の象徴であるこの学園は滅び、人間とモンスターと争いが始まってしまう。それを防いだのだ。

彼女を失ったヴァインセントは悲しみに打ちひしがれたが、争いを望まなかった彼女の意思に従いハンターへの復讐はしなかった。

「ちょっと待ってください。それとネレンに危険が及ぶことに、なんの関係が？」

一人だけ三十年前の事件と、音恋の件との関連を理解していない橙色の髪をした男子生徒が、困惑した表情で問う。生徒会会計で狼人間の血を継ぐ橙空海だ。

「亡くなった娘の属する東間一族は、娘が死んだのは、すべてヴァインセントせんせえのせいだと恨みを抱いているんですよ」

黒髪の男子生徒が緊張感のない声で教えた。生徒会庶務で鴉天狗の血を継ぐ黒巢漆だ。

「さつき桃塚先輩が言ったように、吸血鬼は隙でもつかなきや退治できません。だから弱点になりうる罠を使うのが、効果的」

「ネレンを罠に使うってことか？」

「だからそう言ってるんですよ、さつきから。ヴァインセントせんせえの弱点でしょ、宮崎さんは逆恨みに燃える東間一族のハンターなら、きつとヴァインセントせんせえに寵愛されている宮崎さんを優しく扱ったりしないでしょうね。ヴァインセントせんせえを狩るためなら……宮崎さんが死のうがなんとも思わない」

橙を小馬鹿にしたような表情で、黒巢ははっきりとそう告げた。

ヴァインセントは宮崎音恋のために、忌むべき人間と共存するこの学園の教師になった。再び、人間を愛したのだ。

つまり宮崎音恋は、三十年前のようにヴァインセントを狩るための罠にされかねない。

ようやく理解した橙が、ガタン、と席を立つと声を上げた。

「んなハンターいるのかよ!？」

「いるらしいですよー? 笹川せんせえの一番弟子、現役最強のハンターさんです」

東間紫の姪だと、黒巢は教えた。

養護教諭の笹川仁は、元最強のハンター。そして今、彼の愛弟子である東間紫織が最強の名を受け継いでいる。

「笹川先生の話によれば、ヴァインセントに対する恨みを親から受け継いでいて、何をするか予測で

きないそうだ。冷酷な面があるため、ヴィンセントを狩るためなら手段は選ばない。宮崎音恋の安全は考慮されないだろうとのことだ」

赤神が笹川仁から得たハンターの情報について話す。

駆け出しのハンターである風紀委員も、東間紫織の動向を警戒している。

「三十年前と違って、今はモンスターからもハンターからも、この学園は認められている。でも……方が一ヴィンセント先生が狩られるようなことになったら、吸血鬼側は黙ってない」

「ヴィンセントの血筋は吸血鬼の中でも高い地位にある。再び、人間との争いの火種になりかねない」

桃塚と赤神の言葉に、緑橋は愕然とする。

二人はあえて口にしないが、方が一音恋が命を落とすようなことになれば、あのヴィンセントが黙っているわけがない。東間紫の時彼女ののために我慢したが、二度も愛する人を奪われて彼が復讐をしないはずがないのだ。

ヴィンセントと音恋、どちらが命を落とすことになっても、事態は最悪。

「まだそうなるとは決まっていよいよ」

青ざめて口を押さえた緑橋に、桃塚は優しく笑いかけた。

「まだ音恋ちゃん存在は知られてない。知られる前に……二人を引き離そう」

幸いヴィンセントと宮崎音恋は交際しているわけではない。東間紫織に存在を知られる前に、ヴィンセントを彼女から引き離せれば、最悪の事態は防げる。

「そんなこと、できるんすか？」

橙の問いに、苦笑を漏らしながら桃塚が席を立つ。

「難しいよね、どう考えても。ヴィンセント先生は彼女から離れる気がないんだ。でもなにもしないよりはずっといい。音恋ちゃんはすでにヴィンセント先生の正体を知っている。だから、僕達の秘密も彼女に明かそうと思うんだ。桜子ちゃんのように、学園の秘密を明かし僕達が監視という名目でそばについて、なるべくヴィンセント先生から遠ざける。風紀委員には前もってハンターの彼女への動向を把握してもらう。方が一彼女が現れる前に二人を引き離せなかつたら、なんとしても僕達が音恋ちゃんを隠し通す。音恋ちゃんのため、学園のため」

真剣な眼差しで桃塚は告げた。自分達が音恋のために、学園のためにできることをする。

そんな桃塚に、珍しく橙が反論した。

「桃塚先輩に逆らいたくないですが……俺は反対です！」

桃塚より背が大きいくせに、びくびくしながら橙が言った。桃塚を含めた他の生徒会メンバーは、橙からの反対に驚く。

狼人間は強さに惹かれる性質がある。だから橙は桃塚と赤神、それと生徒会顧問の城島の言うことには常に従っていた。意見に反対することなど、今までなかったことだ。

「宮崎さんの安全を思うなら、風紀委員に協力してもらおうこの案が最善だと思うんですけどー」

風紀委員と協力することが嫌なのかと、黒菓は橙に言う。

「協力することは別に反対じゃねえ!!」

橙は囁みつくように返す。

「反対なのは、ネレンに秘密を明かすことです！ そりゃあ桜子みたいに監視するなら、守りやすくなるしヴァインセントから引き離す口実にもなるってことはわかります。でも……暗闇に号泣したんすよ？ いきなり俺達の正体を明かしたら、ネレンがどうなるかわかったもんじゃありませんよ！」
橙は一気にまくしたてた。

先日、流星を見せるために音恋を夜の学園へ連れてきた。タイミンク悪くモンスターが現れ、橙は音恋の安全のために、やむなく彼女を真つ暗な教室に押し込めた。ところが、モンスターを退治して戻ってみると、いつも冷静沈着な音恋が号泣していたのだ。それからというもの、音恋は不調が続いている。

びく、と緑橋が小さく震えた。黒巢が気付いて横目で見ると、緑橋は俯いている。

「あ、うん……今、音恋ちゃんは……ちゃんと、眠れていないようだね……」

桃塚は口ごもった。橙だけでなく、音恋の号泣には生徒会メンバーもこたえている。

学園の秘密を、今の彼女が受け止められるだろうか。途端に揺らぎ始めた桃塚を見て、黒巢が顔をしかめた。この中で唯一、ここがゲーム世界であることを知る黒巢は、神様のパシリとして音恋をハッピーエンドに導く役割を担っている。

「いや、大丈夫でしょう。姫宮さんもいるし、秘密を共有して親友同士支えあうなら、きつと」

なんとしても音恋をゲームの当事者にしたい黒巢は、桜子の名を出して最初の議題である学園の秘密を明かす案を推す。

「ダメだ！ ネレンに秘密を明かさないと、なんとかできないんすか？」

「チツ、自分で考えてから反対しろよ」

なおも食い下がる橙に、小さく舌打ちをして黒巢はポソツと呟く。

「あん？ 聞こえてんぞ、てめえ!!」

橙と黒巢が喧嘩を始めそうになったため、赤神が橙を黙らせようとしたその時。

「おれも反対だっ！」

突然、生徒会室が開かれ、風紀委員長が部屋に入ってきた。脱色した短い髪をツンツンと撥ねさせて、ピアスをたくさんつけた不良のような風貌の彼は、笹川竹丸。その後ろには副委員長の栗原京子と、二年生の草薙彦一がいた。

「ヴァインセントの正体を知っても、宮崎が深入りを望んでいないからこそ、学園の秘密を教えずにいるんだ！ それなのに、お前達の秘密まで明かすなんて、おれは反対だ！」

「……お前と意見が合う日が来るとはな」

「……奇跡だな」

そう言いながらも険悪ムードで睨み合う竹丸と橙。衝突ばかりする犬猿の仲の二人が意見を一致させるのはこれが初めてだった。

「あれ、何の集まりですかー？」

そこに響く明るい声。栗色のセミロングの髪を靡かせた美少女が、首を傾げつつ生徒会室に足を踏み入れた。宮崎音恋の親友、姫宮桜子だ。その両腕には大量のパンが抱えられている。

「もう！ 食堂で待ちぼうけしちゃったじゃないですか！ お昼抜きなんてだめですよ！」

「あ、ありがとうございます」

「どういたしまして！」

生徒会室の状況をまるで気にしていないような桜子は、桃塚のお礼に胸を張って明るく笑う。

「ところで、なにか問題でも起きたんですか？」

「今、宮崎さんむぐ」

「ナナ！」

黒巢がこことばかりに最初の議案を話そうとするが、緑橋が咄嗟に口を押さえて阻止した。

「？」

桜子に話したら、もちろん賛成するに決まっている。何故なら桜子は、親友の音恋に隠し事をしている状態を、ずっと嫌がっていたからだ。

「そういえば、姫宮はヴァインセント先生が吸血鬼だって知ってるの？」

「え？ 知らなかった。でもそんな気がしました」

草薙が爽やかにさらなる秘密を暴露すると、桜子はサラリと言って笑う。

その反応に、一同は呆気にとられる。そんな風に音恋もあっさり受け止めてくれるなら、こんなに採めないのに、と桃塚は心の中で思った。反対意見がある以上、この話を進めることはできない。

「ヴァインセント先生がどうかしましたか？」

「ヴァインセント先生のこと、どう思う？」

「？ いい先生だと思います」

赤神の質問に首を傾げつつ、桜子は答えた。

「すつごくネレンを気遣ってくれるんですよ！ 何かあったら相談に乗ってくれるって言うてくれたんです。ヴァインセント先生とはいつもネレンのこと話します！ あんな生徒思いのいい先生が担任になってくれて嬉しいですよ！」

にこにこ、と笑う桜子。

それは音恋のことを探られているだけではないのか。数名がそう思ったが、嬉しそうな桜子にはなにも言えなかった。桜子の中で、ヴァインセントの好感度は高い。

三十年前の事件を知らない桜子にどう話したら理解してもらえるか。悩む桃塚は竹丸に視線を送る。竹丸もお手上げた。

「で、ヴァインセント先生がなにか？」

「あ、いや……なんでもないよ」

ひとまずは保留にしよう。桃塚は橙達に視線でそう伝えた。

「あ、そうだ。桃塚先輩達に、折入ってご相談があるんですけど……」

「ん？ なにかな？」

「ネレンに……学園の秘密を打ち明けてもいいですか？」

桜子の発言が、ちょうど今の議案と被って桃塚は笑みをひきつらせる。

ちよんちよん、と人差し指を合わせながら、桜子は続けた。

「なんか……よくわからないんですけど、ネレンが秘密を知ってるって言ったんです。もしかして学園の秘密かもしれないと思ったんですけど、違ったら怖いので聞くに聞けなくて……どうしたらいいですかね？」

「あ、それは……」

「だめだ！ 今ネレンは寝不足だろ？ そんな時に話すなんてだめだ！」

音恋は吸血鬼の存在を知っている。おそらく音恋の言った秘密とはそのことだろうが、桜子は音恋が吸血鬼の存在を知っていることを知らない。

桃塚が説明する前に、橙が力強く却下した。音恋の不調を言われると弱い桜子は、ハッとしように口をつぐむ。

「俺は正体を明かす」

「えっ？」

橙と竹丸がそろって桜子に説教している中、赤神が桃塚にだけ聞こえるように耳打ちする。

「もう吸血鬼の存在は知っているんだ。俺が正体を明かしても、現状は変わらないだろう」

「え、淳？ 明かしてどうするの？」

生徒会室を出て行こうとする赤神を、桃塚は慌てて引き留めた。

振り返った赤神は、ニヤリと意味ありげな笑みを浮かべる。そして何も答えず、生徒会室をあとにした。

「え、ちよ、今の笑みはなに？ なんなの淳？ よくわからないけど、今考えてること、よくない

ことだよね？ よくないよ！ よくないと僕は思う！」

ただならぬ予感に、桃塚は赤神を追い掛けて部屋を飛び出す。

それを見送る緑橋は浮かない顔だ。

——せっかく上手くことが運びそうだったのに、音恋を関係者にする案は止まってしまった。

黒巢は眉間にシワを寄せて部屋を見回すと、大きなため息をついた。

三話 元凶の記憶

翌日の体調は、最悪だった。

一睡もできないまま朝を迎えた私、宮崎音恋は、起きたまま夢を見ているような^{おぼつか}覚束ない感覚で身支度をする。

いくら万能薬である純血の吸血鬼の血で体調を整えても、倒れてしまいうまくないフラフラしていた。とにかく眠気を覚まそうとエスプレッソをストレートで飲んだけれど、イマイチ効果なし。

「音恋ちゃん、大丈夫？ 休んだ方がいいよ？」

一緒に朝食をとっていた桃塚先輩が、心配そうに声をかけてきた。けれど、寮の部屋に一人きりでいることが嫌で、私は大丈夫だと伝えて学校に行く支度をするため部屋に戻った。

だけど、部屋の鏡に映った自分の顔は、病的に白い上に、くつきりと^{くま}隈が浮かんでいて、我ながらひどい。桃塚先輩が心配するのもわかる。

待ち合わせ場所に現れたサクラはいつもと変わらない様子で、フラフラする私の鞆を持ってくれた。昨日、泣きそうなサクラに思わず秘密を知っていると行ってしまったけれど、何も訊かれなくてほっとした。

学校に着く頃には、体調は更に悪化して、チクチクと小さな頭痛までしていた。いよいよヴィンス先生の血ではカバーしきれなくなったらしい。

今日から本格的に体育祭の練習が始まるというのに、これでは本当に倒れてしまいそうだ。私は額を押さえて、自分の席でじっと苦痛に耐えた。

昼休みになれば、ヴィンス先生の血の入ったお弁当がある。それを食べれば、幾分か体調も楽になると思う。けれど、それまで持ちそうにない。せめて少しでも仮眠ができればいいけれど。

「音恋さん。保健室へ……私が運びましょう」

声をかけられて顔を上げれば、いつの間にか目の前にヴィンス先生がいた。ヴィンス先生は心配そうに青い瞳を私に向けている。その直後、身体がふわっと浮いた。またお姫様抱っこされたみたいで。

ヴィンス先生は、クラスメイト達に何か伝えると私を抱えて教室を出た。

これがいけないのに、私を包む甘い香りに安心してしまう。ヴィンス先生が上手なのか、それとも私が隙だらけなのか。

近くに入り込まれてしまう。こうやってそばに誰かの存在を感じてしまうから、独りが苦になっってしまうんだ。わかっているのに。わかっているのに、私は継つぎるようにヴィンス先生のスーツを握

り締めてしまう。

ああ……どうすれば以前の私に戻れるのですか？

どうすれば、あの闇の恐怖を忘れられるのでしょうか？

解決方法がわからないまま、私は束の間の眠りに落ちた。

久し振りに眠れたと思う。夢も見た。

あれは、確かに自分。前世の私が、病室のベッドの上にいた。

私はゲームをしている。ぼやけてはつきりしないけれど、大好きだった乙女ゲームの『漆黒鴉字園』をプレイしているようだ。

ああ、これは前世の最後の記憶だ。そう気付いた。なかなか退院できず、病室にこもりつきりでゲームだけが唯一の楽しみだった。

最後は誰のルートだっけ？ 思い出そうとしたら、何かが喉に込み上げてきた。

堪たえきれず吐き出すと——深紅の血。例えばの無い気持ち悪さに襲われて倒れてしまう。

じわじわと黒色に侵食されて、やがて真っ黒になった。

そこで、私は死んだ。

死んでもずっと、黒一色だった。闇の中だった。

ずっと、ずっと。

何も見えない。何も見えない。何も見えない。

ここには何も無いから、見えない。

声を上げて、自分の声が聞こえない。

自分の手の先も、見えない。自分の存在自体、感じられない。

無に等しい闇の中で、怖くてしようがなかった。

永遠とも思える長い時間、私は独りきりだった。

もがきたくても、身体がないからもがけない。自分の存在を示したくても、声も出ない。

ここは無だ。何も無い。私の意識があるはずなのに、何も無い。ただの闇しかない。

このまま闇に吞まれる。消えてしまう。

誰か、誰か。

そう叫ぶ。でも誰からも返事なんてこない。誰にも届かない。私は独りきりだ。

このまま、消えてしまう。消えてしまう。

お願い。誰か、誰か。私をここから出して。

私を助けて。助けて。助けて。

私を消さないで。

私はここにいます。ここにいます。誰か、誰か、誰か。

私はここにいます。

声が出なくても、叫び続けた。何度も何度も、ずっと泣きながら叫び続けた。

どれぐらいの時間が過ぎたかわからない。

ここには時間すら無いのかもしれない。

だが突如、辺り一面の闇が光に覆われる。

眩いばかりの真っ白な空間。果てしなく続く白い世界。

私の目の前には――

四話 元凶の記憶 (ヴィンセント)

その日の音恋さんは、とても辛そうに見えた。あまり眠れていないようで、目の下の隈が痛々しい。今日から体育祭の練習が始まる。それじゃなくても苦手な体育だというのに、この様子では間違いなく倒れてしまうだろう。

「音恋さん。保健室へ……私が運びましょう」

とうとう机に突っ伏してしまった彼女の前に立ち、その声をかける。

一体なにが、彼女をここまで追い詰めているのだろうか。青白い顔でぼんやり見上げてくる音恋さんは、とても自分の足で歩けそうにない。

そう判断した私は、音恋さんの身体を持ち上げた。クラス委員に後を任せて、保健室に向かう。すると、辛そうに息を吐く音恋さんが、私のスーツを握り締めながら肩に凭れてきた。

熱い息が、私の首にかかる。音恋さんは私の腕の中で寝息を立て始めた。

保健室に着くなり、養護教諭の笹川先生が顔をしかめる。

「……………あちゃー」

「午後まで寝かせてあげてください」

「お安いご用だ」

音恋さんをベッドに下ろしてから、スーツを握り締める彼女の手をそっと外す。

すると、その小さな手が私の右手を掴んだ。弱々しくも、私の手を握り締める。

離れてほしくない。そんな意思表示に笑みが溢れてしまう。

どうやら、一人になりたくないようですね。

あとで、姫宮さんに添い寝を頼んでおこう。誰かが一緒にいれば、不眠も解消されるはず。

「……………授業、出るよ」

「……………」

音恋さんと繋いだ手をじつと凝視しながら、笹川先生が言う。返答に迷った。

この手を放してしまえば、音恋さんは目を覚ましてしまうかもしれない。だからと言って、代わりに笹川先生の手を握らせたくはない。このまま音恋さんのそばにいたい。

「ちゃんと授業をやってくださいよ？ ヴィンセントせんせ」

「大事な生徒は、彼女だけです」

「……………はつきり言うな」

事実だ。教師など、彼女のそばにいるための口実。

しかし、いい加減にこなしていれば、音恋さんに失望されてしまう。仕方なく、小さくて冷たい手を外す。すると、今度は袖を握り締められた。何かを握り締めるだけで音恋さんが安心して眠れるならと、上着を脱いで掛け布団の上に置く。

「んっ」

音恋さんは寝返りを打つと、きゅっとスーツを握り締めて深い息を吐いた。

どうやら大丈夫そうだ。微笑みを零して音恋さんの頭を撫でる。名残惜しいが、そばを離れる。

笹川先生は、机に寄りかかり神妙な顔付きで私を見ていた。そんな彼に、去り際よろしくと伝えて授業に向かう。

三限目までは授業を行ったが、四限目は自習を言い渡して保健室に戻った。

笹川先生の話によれば、音恋さんはぐっすり眠っていたらしい。

カーテンを開き、音恋さんのもとに歩み寄る。規則正しい寝息と健やかな寝顔に安堵した。

音恋さんを苦しめている不眠の種。それが一体何なのかはわからないが、記憶を覗けばわかる。

闇の中、震えて涙を流していたことと関係があるはずだ。その理由を突き止めて、取り除く。

「音恋さん。貴女の記憶を少し覗かせていただきますね」

音恋さんの額に唇を近付けてそっと囁く。

前髪を左手で退かして、露わになった彼女の額に手を置いた。音恋さんの意識に入り込み、彼女の不眠の原因を探る。眠れなくなるほどのトラウマがあったのか、音恋さんも覚えていない幼い記憶から覗いていった。しかし、特段、彼女が恐怖するような記憶は見当たらない。

そこで、彼女が最も恐怖した記憶を引つ張り出す。しかし、それを見ると、音恋さんもその記憶を見ることになるため、急いで終わらせなくてはならない。

出てきた記憶は、だいぶ奥に在ったもの。

その映像は、ずいぶんと臃気おぼろげなものだった。本人が明確に記憶していなくとも、自分には鮮明に見えるはずだ。それなのにぼやけているのを妙に思った。

臃気ながらも認識できたのは病室の中。ベッドの上に少女がいた。少女の顔はぼやけていて見えない。黒い髪は短く、細くやつれた手には、ゲーム機が握られていた。その少女の雰囲気は、どことなく音恋さんに似ていた。

否、彼女は音恋さんだ。

これは音恋さんの記憶。中心に居るのは記憶を持つ本人以外にありえない。少女が音恋さんでなくてはおかしい。

しかし、この少女の年齢は音恋さんとあまり変わらないように見える。これは今からだいぶ遠い記憶だというのに。

一体この記憶は、なんだ？

見ているとふいに少女が吐血して倒れた。映像がじわじわと隅から黒く染まっていく。

やがて、すべてが黒一色に呑みこまれて消えた。そして真つ黒な映像が続く。

私は一度、音恋さんの意識から離れて、目を開いた。

音恋さんは斃うなされているのか、眉間にシワを寄せて呼吸を乱している。

やはり今のは彼女の記憶に間違いない。不可解に思いつつ、もう一度、その記憶を覗いた。

まだ黒一色の映像が続いている。まるで時間の流れがわからない。

一分か、十分か、一時間か、一日か、一ヶ月か、それとも一年。どれほどの時間が経ったのかわからない。闇の中、音恋さんの姿は見えなかった。彼女の記憶なのに、彼女がいない。しかし気配は感じる。ひしひしと彼女の恐怖が伝わってくる。

この記憶こそ、彼女が暗闇で泣いた原因。彼女の不眠の原因だと確信した。

しかし、この記憶は、なんだ？

その疑問の答えは、すぐに出た。

一瞬で映像が白一色に変わったかと思えば、ポツと炎が燃え上がる音がする。巨大な金色の輪に幾つもの炎が灯っていた。

その輪の中心に、巨大なコブラ——いや、頭がコブラに似た、ドラゴンのような巨大な生物がいた。

かつてノルウェーで十メートルほどのトロールを見掛けたことがあるが、映像の中の生物はそれ以上に大きかった。

異形のモンスターと呼ぶには、あまりにも神々しい雰囲気。翼を含めた全身は青黒く、長く伸びた首は青い。目は額にも一つあり、計三つ。その目はある一点に向けられていた。

視線の先に音恋さんを感じた。姿は見えない。それでもそこにいるとわかる。

——まさか。



今と姿が異なる音恋さん。血を吐いて倒れた後の闇。そしてこの白い空間と神々しい生物。私の中で、一つの可能性が出た。

「君は誤った選択をしてしまった」

その時、突然背後から青年のものらしき声があった。しかし、何の気配も感じない。

「あーあ、怒らせてしまったよ？ 君には期待していたのに、とても残念だ」

振り返った。遙か彼方^{かなた}まで続く白い地平線。そのどこにも声の主の姿はない。

「早く仲直りした方がいい。さもないと彼女が……苦しむことになる」

直接、私に向けられた言葉。ここに私以外の存在が紛れ込んでいる。

私は音恋さんの意識から離れて、目を開いた。

その瞬間、柔らかない感触が顔に当たった。その正体は、枕。投げ付けられたそれは、私の足元に落ちた。

「……音恋さん」

ベッドに起き上がった音恋さんが、肩を激しく上下に揺らして苦しそうに呼吸をしている。

名前を呼ぶと俯^{うつむ}いていた顔を上げた。その顔に、胸がチクリと痛む。彼女の瞳からは、とめどなく雫^{しずく}が流れ落ちていく。その瞳が、きつく私を睨^{にら}んだ。

「なんでっ……勝手に、記憶を……」

「……すみません、音恋さん」

絞り出すような細かい声が震える唇から出る。

「……なんで、あなたは……そうなんですか……。なんで、許可なくずかずかと……私の心に入ってくるのですか……」

彼女の顔を覆う小さな手から、涙が落ちていく。

その涙を拭おうと手を伸ばしたら、その手を音恋さんに振り払われた。

「触らないでっ……!!」

彼女の拒絶が、胸に突き刺さる。

音恋さんはベッドから降りたが、よろけてベッドに両手をついた。支えたくても、もう一度手を伸ばすことに躊躇してしまふ。

「……思い出すべきじゃなかったのに……なのに……」

なぜか、俯いた彼女がそのまま消えてしまいそうに思えて、私はもう一度手を伸ばした。

しかし、それが届く前。

「これ以上……私に近付かないでください!」

音恋さんはクリーム色のカーテンを振り払うと、保健室から飛び出して行ってしまった。

「おい? 一体なにしたんだよ?」

「……………」

尋常でない音恋さんの様子に、笹川先生が戸惑ったようにドアと私を交互に見ながら問う。

思い出すべきでない記憶。あれは——音恋さんの前世の記憶。

「……前世など、お伽噺だと」

「は?」

私はそれほど多くの人間の意識を覗いたわけではないが、生まれる以前の記憶を持ち合わせていた人間はいなかった。他の吸血鬼からも、前世の記憶を持つ人間に会ったという話は聞いたことがない。

輪廻や前世などというものは、存在しないものだと思っていた。

だがそれは、誤った認識だったようだ。あれは間違いなく、音恋さんの死後の記憶だ。

「……誰か、私達の他に保健室を訪れた者はいませんか?」

「誰も来ていないぞ。それより音恋ちゃんを追わなくていいのか? 泣いていたように見えたが……」

今の映像が、他の吸血鬼の見せた幻覚という可能性はない。引退したとはいえ、最強のハンターと名を馳せたこの男の腕は今も衰えてはいない。他の吸血鬼の侵入に気が付かないわけがないのだ。私も気付かないわけがない。

心配のない生き物はいない。

呼吸をすればその音が聞こえるし、生きていく以上、心臓の鼓動が聞こえるはずだ。

音もなく心配もなく形跡もなく、音恋さんの記憶に入り込んだ謎の声。

一体、何者なんだ?

「おめーが追わないなら、俺が」

笹川先生が動くより先に保健室を飛び出し、音恋さんの匂いを辿った。

あの神々しい三つ目の異形な生き物は、神と呼ぶべき存在。

——さもないと彼女が……苦しむことになる。

それを告げたのは、神の声とでも言うのか。

五話 接近禁止

どうして暗闇が怖いのか。どうして独りが嫌なのか。わかった。わかってしまった。

奥底にしまわれていたあの記憶が、無意識に影響していたんだ。

記憶の中の、神々しいドラゴンのような姿をしたもの。あれがシヴァ。この世界の創造主で、私をここに転生させた神様だ。

ヴィンス先生が記憶を覗いたせいで、前世の、死んだ後の記憶を鮮明に思い出してしまった。人の記憶を覗くなど、なんて迷惑な能力なのだろう。

ふつふつと湧き上がる怒りと、あの暗闇の中にいた時の恐怖で思考はぐちゃぐちゃ。ちゃんと呼吸がしたくて、私は階段を駆け上がる。屋上に行けば、逃げ切れる気がした。解放されるような気がした。

流れる涙を震える手で拭いながら、私はただ屋上を目指す。

屋上の重たい扉を押し開け、眩しい光を全身に浴びる。私は少し冷たく感じる空気を胸一杯に吸い込んで、大きく深呼吸した。

逃げ切れたような気がする。でも実際は、何からも逃げられていない。

その場で立ち尽くしていると、声をかけられた。

「宮崎？ どう……つした!？」

フェンスのそばに、生徒が数人いる。その中には顔見知りの風紀委員達がいた。彼らの手元にお弁当やパンがあると見ると、昼食中らしい。

彼らの他に、生徒はいない。よく見れば、屋上の半分をブルーシートが覆っていた。金曜日の夜、流星を見た時に敷いていたものかと思っただけで違おうようだ。

風で捲かれたブルーシートの下には、挟まれたコンクリートが見えた。ブルーシートは、その破損を隠すためだったらしく、慌てた様子の笹川先輩がスライディングして捲かれたブルーシートを元に戻した。

「屋上は今使用禁止だぞ？」

「……すみません。知りませんでした。昨日も今日も、ホームルームに出ていなかったのです」

使用禁止の屋上を生徒が使わないように、風紀委員が見張りを兼ねて昼食中なのです。理解しました。

その時、フツ、と背後に風を感じた気がした。振り返らずとも誰がいるのか予想はつく。私は急いで笹川先輩のもとに駆け寄り、彼の背中に隠れた。扉のところには、予想通りヴィンス先生が立っていた。

「どうしたんだよ？ 宮崎」

爽やかな笑みを浮かべながら、草薙先輩が顔を覗いてきた。私は笹川先輩を盾にしたまま黙って込む。

今、ヴィンス先生とは口をききたくない。彼は二度も無断で私の記憶を覗いた。おまけに今回は絶対に思い出したくなかった前世の記憶を引き出された。

シヴァ様登場シーンには、さぞかし困惑したことだろう。でも聞かれたところで答えるつもりはないし、答えられない。なにより、死の記憶が甦った私の方が混乱している。

扉のところ立っただけのまま、ヴィンス先生は近付こうとはしなかった。ただ、私に悲しげな眼差しを向けるだけ。そんな目で見ても許しません。笹川先輩の背に隠れて、私はその眼差しを避けた。

「……草薙君。少し話があります」

一分ほどの沈黙の後、ヴィンス先生は、私の隣に立つ草薙先輩に声をかけた。

急に指名された草薙先輩は、少し困った顔をしつつ笹川先輩と視線を交わす。そして、苦笑を浮かべながらヴィンス先生のもとにいき、二人揃って屋上を出て行った。

「……一体何があったんだ？」

「話したくありません」

笹川先輩が顔だけ振り返り、私に険しい表情で問う。私が事情を話さないことで、想像を膨らませてしまったらしく、笹川先輩の表情が更に険しくなる。私をフェンスの側まで連れていくとそこに座らせた。

「いいか、宮崎。お前は悪くないぞ。悪いのはあっちだ。話してもいいんだぞ。早く吐くんだ！

おれが狩るっ！」

「竹ちゃん、落ち着いて。決め付けてはだめ」

私の二の腕を握り締めて問い詰める笹川先輩の頭を、ペしりと掌で叩くのはポニーテールの栗原先輩。ゲームでも冷静な栗原先輩は、突っ走りやすい笹川先輩のストッパー役だった。

「笹川先輩が想像しているようなことはされていません」

何を想像したかは知りませんが。

「ただの……ちよつとした揉め事です」

「宮崎さん、無理に話さなくてもいいわ。彦一くんを見てくる」

何があつたか問い詰めたくてしようがない様子の笹川先輩は、栗原先輩に止められてぐっと堪えている。栗原先輩は、吸血鬼に連れていかれた草薙先輩の様子を見に向かおうとしたけれど、一度足を止めて笹川先輩を振り返る。

「竹ちゃん」

「ん？」

「大好き」

「……………!!」

栗原先輩はそのまま言い逃げ。瞬き二つで理解した笹川先輩の顔が爆発したみたいに一瞬で真っ赤になる。

「だからっ……!! お前それやめっ……!!」

しどろもどろになって言っても既に栗原先輩の姿は屋上にない。クスクスと他の風紀委員達が笑う。ゲームでも笹川先輩に想いを寄せる栗原先輩のこのアプローチは人気で、私も好きだった。目の前で見て可愛らしくって、少し和むことができた私は肩の力が抜けた。

「そ、それで、宮崎。体調は落ち着いたのか？」

笑うな、と後輩達を一睨みすると、真つ赤な顔のまま笹川先輩は話題を変える。今のやり取りには触れてほしくないようです。

「ホームルームからずつと保健室で眠っていました」

「そうか。それならよかった。一年は午後には体育があるだろ？ 出られそうか？」

「はい、大丈夫です」

屋上まで走って来られたから、体育もやれるはず。ヴィンス先生の血を摂取していなくとも、たぶん。……いや、どうでしょう。答えたあとに自信がなくなる。それが顔に出たのか、笹川先輩の顔が途端に心配そうになる。

「宮崎、差し入れ」

そこに草薙先輩と栗原先輩が戻ってきた。草薙先輩の手には、見覚えのある青チェックのナプキンで包まれたお弁当箱。

ヴィンス先生はこれを渡すために草薙先輩を呼んだようです。

「あの、受け取れません」

私の前まで来て座った草薙先輩が、持っていた弁当箱を開ける。

「だーめ。これを食べさせるように言いつかってんの。はい、あーん」

ヴィンス先生のもはもう受け取りたくない。受け取り拒否をしたけれど、草薙先輩は赤いタコさんウィンナーを箸で持ち上げると、有無を言わず私の口に押し込んだ。口に入ってしまったのなら仕方がない。呑み込めるようにもぐもぐ噛むと、草薙先輩は満足げな笑みを浮かべた。

「あはは、宮崎はなんか小動物みたいで可愛いな。もー一回、あーん」

「……私もあげたい」

隣でじつと見ていた栗原先輩がそんなことを言い出す。

「彦一センパイ、俺もやりたいです」と一年生の風紀委員。

「お、おれも！」と笹川先輩も言い出した。

黒の腕章をつけた風紀委員に、私はたちまち取り囲まれました。

「おい草薙、俺もあげるべー！」

「だめ。あとはおれが食べさせてあげるの！」

「彦一くん、私もつとあげたい」

「京子先輩はさつきやったじゃないですかー」

小動物の餌やりよろしく私は草薙先輩を中心に風紀委員の面々にお弁当を食べさせてもらうことになりました。

その間、無頓着な私は現実逃避気分、死んだあとの記憶について考える。

あの暗闇は、死後の世界だろうか。

前世の記憶が私の現世に影響しているのは、きっと前世の記憶を閉じ込める蓋を意図的に開けられているからでしょう。

それにしても……、と死んだ時のことを冷静に思う。ずいぶん呆気なく死んだものか。そういえば、最期の時、誰のルートをやっていたっけ？

私は死の間際まで、この漆黒鴉学園を舞台にしたゲームをプレイしていた。

あの映像では、攻略相手が誰だったかわからない。

画面に映っていたシーンは、ちょうど夏休みのイベントだった。あのゲームの中で、私が一番好きなシーンだ。誰のルートでも、夏休みのあのイベントが一番好き。そのイベントをやっていたのだから、きっと私の最期は幸せだったはずだ。

それなのに、なんで神様はゲームの世界に転生させるなんて、余計なことを……

「宮崎。明日も一緒に食べるか？」

「え？」

「ヴァインセント先生がそうしるって」

草薙先輩の言葉に驚く。

私の昼休みの時間を大事にしていた彼は、私の怒りが収まるまで身を引くことにしたのでしょうか。それで私の許しを得ようとするなんて……ひどい。許せるわけがない。

これ以上は近付いてほしくない。このまま離れるならそれでいい。もう離れてほしいんだ。

私はもう一度——独りに慣れればいい。

草薙先輩が私の顔を見ているから、この胸の中で喚わめいている感情が表情に出ないように心掛ける。楽しそうに会話する風紀委員達に食べさせてもらいながら、私はお弁当を完食した。

「ちょっとこれ返しに行つてくらあ」

弁当箱は草薙先輩が返しにくくと言ってくれたので、もう作らないでくださいと伝言も頼んだ。

一年生の風紀委員が「草薙勇者」とボソリ呟いた。ヴァインセント先生との接触は風紀委員の中では、とてもハードルが高いものらしい。

五限目の体育に合うように、私は早めに教室に戻ることにした。

栗原先輩と笹川先輩が途中まで送ってくれた。

「宮崎。何かあったら遠慮なく、俺や京子を頼れよ」

別れる際にかけられた言葉に、深々と頭を下げる。二人は三年の教室に向かい、私はもう一階下にある一年の教室に戻るために階段を下りた。そこで気づく。風紀委員達は誰も指摘しなかったけれど、私の顔はひどいことになっていないだろうか。泣いた跡があると、サクラに心配をかけてしまう。

私は慌てて、ごしごしと制服の袖で顔を擦すった。

ズル。

うっかり両目を擦ったものだから、足元が見えず階段を踏み外してしまった。

あ、落ちる。

なるべく軽傷に抑えようと、前に手を出したら、目の前に男子生徒の制服があった。

相手の顔を確認できないまま、押し倒すような形で階段を落ちる。
ドタン。

以前階段から落ちた時より大きな音が響く。なのに感じるはずの痛みがなかった。不思議に思っ
て目を開けると、私は下になった男子生徒に抱き締められるように受け止められていた。つまり、
私が受けるはずだった痛みは、すべて彼が受けてしまったことになる。

私は慌てて起き上がり、下敷きにしてしまった男子生徒の安否を確かめる。そこで、彼の腕にあ
る白い腕章が目に入った。

「俺の電話を散々無視しておいて……」

聞こえてきた声に、びくりと固まる。これは、紛れもないあの人の声。絶対に耳元で聞かないよ
うにと、気を付けていた危険な声の持ち主。

「俺の胸に飛び込んでくるなんて、積極的だな。……音恋」

意味ありげな微笑みを浮かべた、深紅の髪の毛の容姿端麗な副生徒会長、赤神淳先輩が私の下にいた。
思った以上にがっしりした胸板に付いた手を退けて、すぐさま逃げようとした。けれど、赤神先
輩はそれより早く身を起こし、私の両肩を掴んで私が逃げるのを阻止した。

「先輩からの電話を無視するなんて、失礼だと思わないのか？ 昨日は三回も掛けたのだが？」

「昨日ですか……？ すみません、昨日は一度も携帯電話を見なかったのです」

昨日電話が掛かってきた記憶はない。携帯電話を見た記憶もない。素直に謝ると、スツと赤神先
輩が目を細めた。

「土曜日は、わざと切っただろう？」

「……すみません」

わざと切りました、はい。怒られることを覚悟したけれど。

「そんなに俺の声に、弱いのかい？」

微笑を浮かべた赤神先輩が、私の顎を掴んで顔を上げさせた。

確かに私は、前世から赤神先輩の声に弱い。だけど、はい弱いですが、とは口に出したくない。

それよりも、階段下で座っている赤神先輩の膝の上にいるこの体勢はともまずい。昼休みがも
うすぐ終わる時間。この階段は教室に戻る二年生や三年生が行き交う場所だ。もしこんなところを
赤神ファンに見付かったら、またもやリンチ確定です。

「それより、赤神先輩。お怪我はありませんか？ 保健室で診てもらった方がいいと思います」

「お礼を言うのが先じゃないのか？ 音恋」

「受け止めてくださりありがとうございます」

「心がこもっていない」

「……申し訳ありません、今機嫌が悪いので」

「先輩に電話を無視されている俺よりも？」

謝って立ち上がるうとしたのだけれど、また阻止される。

機嫌悪いです。貴方は記憶を無断で覗かれたことありますか？ 死の記憶を甦らせられたことが
ありますか？ 先輩ごときに電話を無視されたことなんて比べ物になりません。

さっきの怒りがふつふつとぶり返してきた。私は赤神先輩にそれをぶつけないようにぐつと堪える。そうして私が眉間にシワを寄せると、その反応が気に入ったのか赤神先輩は楽しげな笑みを浮かべた。

「俺の声でその機嫌、直してやろうか？」

「遠慮します」

直るのは、貴方の機嫌でしょう。弱みを攻めていたぶって、楽しみたいだけだということはわかっています。

「また囁いてやる」

「お断りします」

「えん」

「遠慮します」

「そう言」

「放してください」

「……」

私の機嫌は悪いのです。それを態度で示すと、赤神先輩は顔をしかめた。

さあ、もう放してください。赤神先輩を見据えていると。

「音恋——んっ！」

赤神先輩は、狙ったように私の一番弱い囁きボイスを出してきたので、両手でその口を塞いだ。

私に口を塞がれた赤神先輩は、目を丸めたあと、眉間にシワを寄せた。

また声攻めを受けるつもりはありません。

「もう放してください。授業に遅れてしまいます」

もう一度強く言っても、赤神先輩は私から手を放そうとしない。

暗いブラウンの瞳で私を不機嫌に見つめている。数秒後、赤神先輩は呆れたようにため息を吐いた。その息がかかった手がちよつとむず痒い。

赤神先輩は私の左肩を押さえていた右手を、私の頭に置いた。それから、大きな掌で、髪を整えるように撫でてくる。黙って私の頭を撫でる赤神先輩。意味がわからない。その意図がわからない。

何故赤神先輩は、私の頭を撫でているのでしょうか。

「……………」

ただ黙って私を見つめながら頭を撫でてくる赤神先輩に違和感を抱く。赤神先輩に優しい手つきで頭を撫でられるのが、とつても変な感じ。

そのせいか、どうしてだか、胸が苦しくなつて、視界が霞んだ。優しい掌に、泣きそうになつてしまう。泣いたばかりだというのに、どうして最近はこちらもすぐ涙が出してしまうのだろう。目の前にいる赤神先輩に、情けない顔を見られないように俯いた次の瞬間。

「ん」

赤神先輩が顔を近付けた。その距離零。

お互いの鼻先が触れている。赤神先輩の口を押さえる私の両手がなければ、唇が触れていた。何

故なら自分の手の甲が唇に触れているから。

深紅の髪が私の顔にかかるほどの近距離で、赤神先輩のぎらついた瞳が見つめていた。見覚えのある熱のこもった眼差しは、まるで獲物を捉えようとしているみたい。その獲物は——私だ。

六話 涙目（赤神淳）

食堂で昼食を済ませ、昼休みが終わる前に教室へ戻ろうとした時だった。階段の上から女子生徒が降ってきた。

咄嗟とつさに受け止めた方がいいが、踏み留まらず背中から落ちた。とはいえ、モンスターの俺に大した痛みはない。

だが人間である彼女だったら怪我をしていたところだろう。胸を擦る彼女の甘い匂いが辺りに散らばる。それを吸い込みながら、俺は起き上がって彼女を捕らえた。

「俺の電話を散々無視しておいて、俺の胸に飛び込んでくるなんて、積極的だな？ ……音恋」
そう言うと、彼女は俺の胸を押し退けて逃げようとした。が、無力な人間の音恋が俺を振り払えるわけもなく、そのまま膝の上に留まる。

昨日は吸血鬼である俺の正体を明かそうと、呼び出しの電話をかけた。それなのに、彼女は一度も電話に出なかったのだ。しかし、音恋の様子からして、本当に電話に気付いてなかったようだから、昨日のことは許してやる。
「土曜日は、わざと切っただろう？」
「……すみません」
言えば彼女はすんなり謝罪する。
「そんなに俺の声に、弱いのかい？」
微笑を浮かべ、顎あごを掴んで上向かせた彼女に問う。

彼女が俺の電話に出ないのは、俺の声に弱いからだともう知っている。
俺の電話を無視し続けた、その仕返しを今してやろう。
察しのいい音恋は、仕返しされる前に謝って逃げようとした。もちろん、逃がさない。
今日の音恋はやけに不機嫌だ。だが、眉間にシワを寄せて唇を突きだしている顔は、可愛いと思えず笑ってしまう。

「俺の声でその機嫌、直してやろうか？」
と言ったら、音恋は即座に断った。

どうやら相当機嫌が悪いらしい。警戒心剥き出しで、猫が毛を逆立てているみたいだ。目の下に隈くまがあるせいか、弱みを見せまいと無理をしているようにも見えた。

その強がりも、俺が囁けば簡単に緩ゆるむはず。そう思っ、低く囁くように音恋の名前を呼んだ瞬間、白くて小さな手で口を塞ふさがれた。

驚いて目を丸める。一体なんなんだ。

彼女はいつもの無表情ではなく、感情を露わにして拒絶してくる。

一体何が、彼女をここまで怒らせているのだろうか。どこか八つ当たりのようにも感じる。この不機嫌はあの夜、彼女が泣いた理由と関係しているのだろうか？

あの時、ヴィンセントがいなければ、俺が涙を流す音恋を抱き締めていた。声を押し殺して泣く音恋を、ヴィンセントが愛おしそうに見つめて頭を撫でていた光景を思い出す。それだけで苛立ちが込み上げる。だがここにヴィンセントはいない。

音恋をきつく抱き締めたい衝動を抑えながら息を吐き出す。

俺の口を塞ぐこの小さな手を外すことは簡単だ。音恋の機嫌を直すため、彼女の好きなこの声で、いくらでも囁いてやる。しかし彼女がそれを望んでいないのなら、他の手を使って彼女を慰めるしかない。

音恋の左肩を押さえていた右手を、彼女の頭に置く。彼女が以前、俺にしたように、ゆっくりと頭を撫でた。長い髪を整えるように、そっと手を動かす。

昨日笹川先生が「女の子は頭を撫でられるのが好きなんだ。女の子を落としたい時は、優しさと包容力で——」とやけに上機嫌に長々と語っていた。

だが、この行為の目的は、落とすとかそういうものではない。ただ音恋を慰めているだけ。音恋がこんな行為で落ちるほど、簡単な女の子じゃないことぐらい理解している。

あの時、どうしようもない俺の苛立ちが拭われたように、彼女の苛立ちを拭うことができればそれでよかった。ついでに彼女の額から香るヴィンセントのマーケティングを掻き消すためでもある。ま

るで自分のものだと主張するかのような、ヴィンセントの匂いに苛立ちを覚えた。

だが——その行為は思ったより効いたらしい。

音恋の表情が変わる。大きな黒い瞳が涙で潤んできた。俺がそうだったように、言葉なき慰めが心に響いたのだろうか。その今にも泣いてしまいそうな顔を見て、抑えたはずの衝動に身体が突き動かされた。

「ん」

音恋の唇を奪おうと顔を近付ける。しかし、俺の口を塞ぐ両手のせいで叶わなかった。彼女の唇に触れられない。

「あ、赤神……先輩？」

驚きに目を見開いた音恋が俺を押し退けて、警戒しながら問うてくる。

音恋のドクドクと乱れた心音が聞こえた。白く細い首で熱い血が脈打つ音がする。

無防備過ぎる彼女が俺の胸を擦り誘惑してくる。

ああ、食べてしまいたい。

湧き上がる欲望で牙が疼く。噛み付いてしまわないように堪えながら、音恋の両手を外した。

「音恋、大事な話をするから……よおく聞け」

彼女の耳に唇を近付けて囁く。

それがいけなかった。彼女の白い首に、噛み付きたくなる。俺の声を聞いて頬を赤らめるその顔が、俺を煽っていることに気付いていない。

「音恋。俺は——」
吸血鬼だ。

ヴァインセントのように、俺の正体も受け入れてもらう。そして、ヴァインセントに代わって俺がそばで彼女を守る。そのためのカミングアウト。

音恋の香りを吸い込んで、息を吐く。彼女が身体を強張らせた。

吸血鬼であることを免罪符にして、この白い肌を舌を這わせた。

それくらいなら許されるだろう。舐めるだけだ。

しかし、突然目の前から音恋を奪われてしまう。

彼女を持ち上げて俺から取り上げたのは、星司だった。

「何してるんだよ!? 淳!」

俺が音恋に噛み付くとも思ったのか、星司は珍しく激怒していた。

だがすぐに「……て、音恋ちゃん軽っ!」と意識が音恋に向く。星司は抱き上げていた音恋を階段の上に降ろす。音恋の頬の赤みは、引いていた。

「邪魔をするなよ、星司」

「一体何しようとしていたの……!」

あと少しで音恋にカミングアウトができた。だが、今は少し暴走しかけていたかもしれない。

じと、と責めるように星司が俺を睨み、音恋を守るように両手を広げる。

俺が音恋に正体をカミングアウトすることを反対している星司は、ただの心配性だ。

「失礼します、先輩方。授業に遅れてしまうので、教室に戻りますね」

音恋は心配性の星司の腕を避けて階段から降りた。その顔は、いつもの無表情に戻っている。

「音恋」

俺の顔を横切って行こうとする音恋を呼び止める。

「次は、出るよ?」

次は電話に出る、とにつこりと笑いかけて伝えた。

電話で呼び出して、カミングアウトして、それからたっぷり可愛がって——食べてやる。

「次は体育だよね。顔色良くなったみたいだけど、無理しないようにね?」

星司は俺の言葉を授業のことだと思っただけで、音恋に無邪気に笑いかけた。

彼女は軽く頭を下げると、黒い髪を揺らしながら行ってしまった。その後ろ姿を見つめる。

あの様子では、次も電話に出そうにない。どうしたら二人きりで会う約束を取り付けられるだろうか。

「……淳、まさか噛み付こうとした?」

「まさか」

横から星司が訊いてきたから、平然と嘘をつく。

人間の食事だけでも生きていけるハーフの俺が、噛み付きたくなったのだ。純血の吸血鬼であるヴァインセントは、俺以上に誘惑されていることだろう。

音恋は、魅惑的な花だ。どうりで恋人でもないのにマーキングをするわけだ。あれは彼女に他の

吸血鬼を近付かせないためのもの。ヴァインセントによる音恋の独占。腹立たしい。

その独占欲が彼女を危険に晒しているのだ。

なんとかヴァインセントから彼女を引き離して、それから音恋を……

——音恋を、俺だけの……

「いたいた。おい、おめーら」

声をかけられて顔を上げれば、階段の上から笹川先生が顔を出した。

「ヴァインセントが音恋ちゃんと喧嘩したみたいだぜ」

「えっ？ 喧嘩？」

その内容に、俺も星司も目を丸める。

あのヴァインセントと音恋が……？

「ああ。音恋ちゃんがヴァインセントを完全拒絶したみたいだ」

笹川先生の声と一緒にチャイムが鳴り響いたが、モンスターの俺達には問題なく聞き取れた。

星司は胸を撫で下ろしたが、俺は顔をしかめた。

あまりのタイミングの悪さに、舌打ちが出そうになる。

なるほど。音恋の不機嫌の理由は、ヴァインセントのせいか。一体何をやらかしてヴァインセントは

彼女をあれほどまで怒らせたのか。

笹川先生が、放課後に詳しい話をする다고告げて、俺達を教室に行くよう急かす。

ああ、それがわかっていれば。さつき——俺が食べてしまったのに。

七話 添い寝

午後の授業は、一年生全体で体育祭の練習。

なのに私は、赤神先輩のせいで授業に遅れてしまった。慌てて髪をポニーテールにしながら校庭に出ると、すでに準備運動が始まっていた。急いで体育の雪島先生に駆け寄り、遅刻したことを謝ると、前髪をぐしゃぐしゃにされました。

「あたしの授業を欠席するわ遅刻するわ……いい度胸ね？ 宮崎」

「申し訳ありません」

「ほら、さっさと準備運動してきなさい」

パン、と軽く肩を叩かれて促される。水色がかかった白髪の彼女は、結構気さくに生徒と接する。想いを寄せている笹川先生に色目を使う女子生徒には、態度がキツいけれど。

雪島先生に軽く頭を下げて、私は準備運動にまぎった。

今日の練習では、まず入場や退場、そして一年生が行う種目を軽くさらっていった。その練習中、何故か女子生徒がざわついている。

彼女達の会話に耳を傾けると、そこにヴァインズ先生の名前が出てきた。

「……………」

一年生の合同練習なので、各クラスの担任もジャージ姿で校庭に出ている。そこにはもちろん、